日本女子大学の寮地区に残されている家具について

—— 明桂寮における家具調査報告（１） ——

Furniture Remaining in the Dormitory at Japan Women's University — Report on a Survey of Furniture in the Meikei-ryô Dormitory (1) —

住居学科　藤井　美羽　関村　啓太　藪下　美雪　薬袋　奈美子
Dept. of Housing and Architecture　Miu Fujii　Keita Sekimura　Miyuki Yabushita　Namiko Minai

抄　　録　日本女子大学に現存する最古の寮建築である明桂寮内に残置された家具を調査した。その結果，勉強机，箪笥，ガラス棚，長机は，1920 年代に製作されたと考えられる家具であり，ある程度，本学内での年代判定の基準とする事が推測できた。また，当時の本学における家具の「同等品文化」が見られ，本学の寮で共通した規格が存在した可能性が考えられる。これらの家具は，文部省傘下の生活改善同盟会が示した家具などと同質の特徴があり，装飾性の少ない実用主義的な家具である。すなわち，当時の国策であった住宅改良運動の影響を受けた可能性が高い家具であり，歴史的な価値があるものとして評価できる。

キーワード：木製家具，歴史的家具，生活改善運動，寮教育，同等品文化

Abstract　We investigated the furniture remaining in the Meikei-ryô Dormitory, the oldest existing dormitory building at Japan Women's University (JWU). We found that the study desks, chests of drawers, glass shelves, and long desks were made in the 1920s, which can be used to some extent as a standard for determining the age of the furniture in the dormitory. In addition, the "culture of equivalent products" (*dô-tô-hin bunka*) of the furniture at JWU at that time can be seen, and it is possible that a common standard existed in the dormitories of the University. These pieces of furniture have the same characteristics as the furniture shown by the Ministry of Education's Alliance for the Improvement of Living Conditions (*seikatsu kaizen dômei-kai*), and are utilitarian objects with little ornamentation. In other words, the furniture was influenced by the housing improvement movement, which was a national policy at the time, and can be evaluated as having historical value.

Keywords: wooden furniture, historic furniture, improvement movement of living conditions, dormitory education, culture of equivalent products (*dô-tô-hin bunka*)

１．研究の背景と目的

生活空間の質や生活行為には，建物としての住空間だけでなく，そこで用いられる家具の影響が大きい。日常生活で用いられる家具は，大量生産されるために常に産業技術や流通方法，そして経済動向に加え，多くの人々の志向性により変化するものであろう。時代とともに変化する，市民の住生活のあり方を理解するためにも，家具とその利用状況を把握することは，客観的な考察のためにも欠かせない。まだ研究があまり進んでいない，日常生活家具の利用と住生活のあり方について検討を行うことは，これからの住居学研究には重要である。そのような問題意識のもと，本稿では 1920 年代に作成されたと考えられる木製家具の調査を行った。

日本女子大学（以下，旧学制下における日本女子大学校も含めて本学とする）においては，1901（明治 34）年の創立以来，現在の文京区目白２丁

目，および，その北側に接して豊島区雑司が谷１丁目近辺において，教育・研究を行ってきている。特に教育においては，寮生活での教育が大切にされ，数多くの寮舎を建築してきた。現在でも雑司が谷１丁目にあるキャンパスは寮地区として，一部の体育施設や実験棟を除いては，寮として運用されている。現在の寮地区には５棟の寮舎があるが，そのうち３棟は休寮中で利用されていない。これらの寮舎の中には数多くの家具が残されている。本稿では，これまでにも過去の使用状況等についての研究が重ねられている明桂寮（1927 年建設）について，保管されている家具をリスト化した。その中から，木製家具を中心として，その特徴を明らかにする。

なお，他大学に目を向けると，例えば，九州大学では，キャンパス移転によって，創設期の家具・什器が，放置され廃棄されつつあるところを再発見され，リスト化し，利活用しようとする動きもみられ[参考文献９)]，その活用や価値について，あるいは大学のストックとして論議されている。本研究の成果は，こういった大学の資産の活用にも貢献することを期待して行うものである。

２．先行研究および研究方法

家具史については，小泉和子の通史[注１)]があり，近代における家具産業に関する研究には新井竜治のもの[注２)]が挙げられる。しかし，個別の報告書などが限られ，家具の編年的な指標が十分ではなく，形態や様式から，その年代を判定するのは，困難であるのが実情である。

そこで，本稿では，藤井美羽（2022）における明桂寮の家具調査の成果[注３)]を利用して，明桂寮の開寮前後である 1920 年代から使用されていると推定できる家具の形態を分析し，各種史料および古写真を用いて年代を確定し，その特徴を報告する。

３．1920 年代における家具に関する時代背景

明治から大正にかけてのわが国の生活様式は，和洋が混在する状態であり，国民の意識を西洋的な生活様式に近づけることによって合理化しようとした「生活改善運動」が国策として進められた。

住宅内の家具においては，和風家具と洋風家具を両方使う「二重生活」を改め，洋風家具を使用する方針が取られた。明桂寮は，生活改善運動の影響を受けた建築である[注４)]ので，その方針に沿った家具が使用されていたと考えるのが妥当であろう。

生活改善運動を推進したのは，文部省傘下に 1920（大正 9）年に発足した生活改善同盟会で，住宅の担当部署は，住宅改善調査委員会であった。同盟会は，運動の指針として，小冊子である『住宅改善の方針』[参考文献１)]を発行している。ここで，家具について「住宅は漸次椅子式に改めること」，「家具は簡便堅牢を旨とし住宅の改善に準ずること」を主張している。洋式建築においては，椅子式になる事は当然として，後者については，「家具は其の構造を出来るだけ簡単にして，取扱に便利で然(し)かも堅牢なことを主眼とするべきである。家具は吾々が日常の生活に最も密接の関係があるだけそれだけ取扱に便利でそして容易(たやす)く破損しないものであらねばならぬ。併しながら堅牢と頑丈とは自ら同一ではないから妥(だ)りに木割を太くして頑丈にする必要はありません」[注５)]と解説されている。

さらに，生活改善同盟会編（1924）においては，家具の改良について，さらに詳しく解説されている。家具の形態についての項目を抜き出すと，下記のような提案がなされている。

「三，同時に使用せぬものは成るべく之を兼用とし，又頻繁に使用せざるものは折畳伸長式，又は組合式にすること」（p.130）

「四，家具の構造は簡便堅牢を主とすること」（上述，p.132）

「五，家具は用材の選択に注意しベニヤ材及び曲木法の応用を盛ならしむること」（p.135）

「六，家具は其の着色及び仕上に特に注意すること」（p.138）

「七，家具の設計には衛生上の要求は勿論意匠や外観をも閑却せぬこと」（p.139）

「八，家具の供給方を成るべく大量生産の方法に依ること」（p.141）

「九，成るべく出来合家具の使用を奨励すること」（p.141）

「一〇，家具は各家庭の事情に適応し且つ家庭で手入の出来るものを選ぶこと」（p.142）

これらの具体的な方針を策定していった生活改善同盟会の家具部門の委員は木檜恕一(こくれよいち)であった。彼は，近代日本の家具産業界に多大な影響を及ぼした家具デザイナーであり，1920 年代の女子教育における住教育における家具の考え方は，同盟会すなわち彼の思想が支配的であった[注６)]。例えば，本学におい

ても，1927（昭和 2）年の講義では木檜恕一の著作が家政学部の参考書として使われていた[注7)]。

4．明桂寮開寮の頃の家具

以上で述べてきたような特徴を念頭に，現在の明桂寮内から，1920 年代頃に製作されたと考えられる家具を選択すると勉強机，箪笥，ガラス棚，長机がこれに相当する。以下，これらについて，検討していく。

4-1　『家庭週報』にみる本学内の家具

1920 年代における本学での家具の使用実態を考える上で参考になる資料は，当時の学内刊行物や成瀬記念館所蔵になる古写真などがある。学内の動向を伝える『家庭週報』の図版は，当時の事例を知るものとして重要である。

現在の明桂寮の西側隣地に 1924（大正 13）年に建設された泉山寮（せんざんりょう）は，本学の学生の急激な増加に対応するために期待されており，『家庭週報』にしばしば紹介された。その記事には，建設過程やその内部の写真が掲載されており，明桂寮に比べて，家具の状況がよくわかる[注8)]。例えば，『家庭週報』757 号（1924 年 8 月 15 日付 6 面）において，「秋から開く泉山寮のファニチユア―机・箪笥・寝台」と題された写真が掲載されている（図１）。また「泉山寮学生居室」（同 764 号，1924 年 10 月 10 日付 5 面）といった写真も掲載されており（図２），「西南

図１．「秋から開く泉山寮のファニチユア―机・箪笥・寝台」（『家庭週報』757 号，1924 年 8 月 15 日付 6 面）

図２．「泉山寮学生居室」（『家庭週報』764 号，1924 年 10 月 10 日付 5 面）

に面した一室，はるかに雑司（ママ）谷の欅の林をのぞみ，新しくて，美しいフアニチユアの中に居をしめて，研究に，修養にいそしむ人の幸が思はれる。」とある。どちらも新築寮に納入される家具が報告されており，模範的で優れたものであると考えられていたことがわかる[注9)]。

これらの写真に掲載されている家具のうち，学習机，箪笥，ガラス棚は，現在明桂寮に見られるものと類似している[注10)]。一方で明桂寮開寮時の居室では，ベッド（寝台）は折りたたみ式であり[注11)]，籐椅子[注12)]は，明桂寮内において発見できなかった。

4-2　当初の家具と推定されるものの検討

次に，『家庭週報』や筆者らが調査した古写真に見られる学習机，箪笥，ガラス棚，長机に類似する家具 4 点について，現在，明桂寮において調査した家具と形態を照合していきたい。

4-2-1　学習机

明桂寮内に残置されている学習机（図３）は，寮内に 15 台認められた。寸法は天板が幅 816mm，奥行 521mm で，その上面までが高さ 727mm（実測値，以下同じ）となっている。天板，脚，貫，トンボ貫，幕板，幕板つなぎ，引出し受桟からなり，木製である。学習机の左右の脚は貫でつながれており，トンボ貫をほぞでつなぐ構成になっている。棚口と足など直角になる個所に，金物をマイナス・ネジで取り付け補強されている部分が見られた。金属の取手が

ついた 2 つの引出しが取り付けられており，左右対称となっている。しかし，トンボ貫がほぞで継がれておらず，上部から釘で打ち付ける形状になっているものになっているものも散見された。仕上げはワックス仕上げである。簡易な構造であるため，損壊しているものもみられた。

各年代での写真および寮生の証言，および同様の形態の学習机が寮内で認められた[注13)]ので，現存する学習机は，開寮当時から使われてきたものである可能性が濃厚である。しかし，古写真や『家庭週報』に映る写真に見られる天板の三方の囲いが失われている。この囲いの痕跡は今回調査でみられた天板には見られなかった（図４）。

図３．学習机

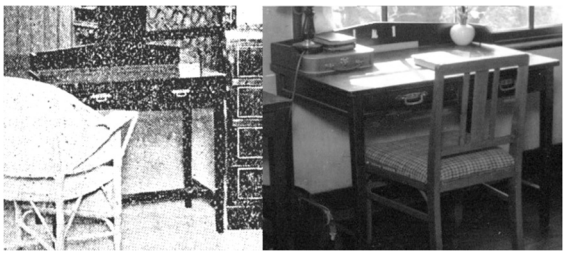

図４．学習机古写真（左：図１を拡大したもの，右：1960 年前後（成瀬記念館蔵の写真を加工））

4-2-2　箪笥およびガラス棚

現在，明桂寮内に残置している箪笥およびガラス棚（図５）は，前者が 47 台，後者が 49 台認められた。

箪笥の寸法は，幅 849mm，奥行 454mm で，高さ 1031mm で，枠，側板，背板，背板つなぎ，引出し，引出し吊桟からなる。各段に底板はなく，地板もないので最下段の下に約 120mm 程度の空洞が存在する。枠と引出しの木材は厚みがあり丈夫な材が使われているが，上述のように底板・地板がなく，背板や上面に薄い合板が使われていることで，重さと費用が抑えられていると考えられる。材が厚いため，風食や損傷が少なく，多くが当初の形態を損なわず残っている。最上段には，鍵穴があり，これにより施錠が可能である。これらは，生活改善同盟会のいう「家具の構造は簡便堅牢を主とすること」に合致している。また，取手が学習机と同一であることから，生産過程での関係性があるものとみられる。

ガラス棚は幅856mm，奥行299mmで，高さ683mmである。上述の箪笥と一体的に使用される。箪笥とガラス棚の幅はおよそ同一であり，箪笥の上部にガラス棚を載せて使用したが，固定するだぼのような部品は存在していない。箪笥とガラス棚を併せると高さは1700mm 程度になる。現状で残されているものは，補修による明らかな違いを除いて，形態差が少なくほぼ同時期に生産されたものとみられる。

図５．箪笥・ガラス棚

1928（昭和 3）年頃に撮影された写真から，使用形態をみるとガラス棚上部には，書籍を置いて使用しており[注14)]，雑貨や日用品の収納の一部として使用されていた。また，当初からガラスの内側にカーテンがかかっているものもあり，プライバシーに配慮したものであるといえる。現在のガラス板は平滑なもので，当初材ではなく取り換えられた可能性も考えられる。

寮の竣工当時の写真と現在の箪笥・ガラス棚を見比べると細部の形態も一致しており，これらは寮内で使用され続けてきたものであると考えられる。改めて，『家庭週報』の記事（図1）とも比べると，その意匠も酷似している。

4-2-3　学習机と箪笥の金物

上述したように，引出しと箪笥の取手の金物は下図のものが使われている。風食の度合いも同程度であり，箪笥と学習机の製作年代などの状況証拠，あるいは目視から同一年代のものと判断できる。家具，または建築物においても細部装飾の年代指標は確立しておらず，この金物を他の細部装飾の年代指標とすることができるので，特に精査する必要がある。

図6．取手の金物（学習机）

4-2-4　長机

明桂寮内に残置されている長机は，地下の浴室などと，建物西側の図書室として使われていた部屋から発見された。①地下の浴室などから発見されたもの（図7）は，7台あり，寸法は天板が幅 1824mm，奥行 665mm で，その上面までが高さ 744mm で，左右対称である。②旧図書室から発見されたもの（図8）は，5台あり，寸法は天板が幅 1671mm，奥行 692mm で，その上面までが高さ 755mm で，こちらも左右対称である。どちらも 6 人が同時に使用できる長机である。①と②は全体の構成は類似しているが，天板の寸法が異なっている。両方とも，左右の脚は貫でつながれており，それをさらに二重のトンボ貫がつなぐ構成になっている。長机のトンボ貫は，①は側面の貫に上部から掛ける形態で，②は差物として貫に差し合わせたものとなっている。開寮から閉寮までの食堂の古写真を 20 枚程度を分析した結果[注15)]，①は特徴的なトンボ貫から，明桂寮食堂でダイニングテーブルとして，一貫して使用したものであることが判明した（図9）。②は泉山寮食堂で使われたものと類似していることが，図 10 よりわかる。②については，例えば，1973（昭和 48）年の泉山寮の建て替え時に隣の明桂寮に持ち込まれたという可能性も考えられよう。以上をまとめると，①も②も 1920 年代には存在した家具であると言えよう。その他，長机が発見されたが，今回の調査では詳細がわからなかったので，今後の調査・研究で考察することとする。

図7．長机①（地階に残置されていたもの）

図8．長机②（旧図書室に残置されていたもの）

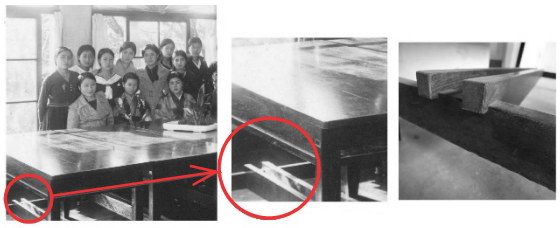

図９．長机①の古写真比較（左：1933 年撮影に撮影された広間（部分，成瀬記念館蔵写真を加工），中：左を拡大したもの，右：長机①のトンボ貫）

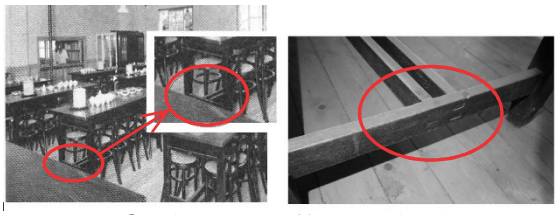

図10．長机②の古写真比較（左：日本女子大学学寮100年研究会編（2007）p.53より加工，中：左を拡大したもの，右：長机②のトンボ貫）

4-2-5　小結

以上より，学習机，箪笥，ガラス棚，長机においては，古写真より 1920 年代当時の家具と類似していることが確認できた。また，『家庭週報』（図１）で「新しい」とされているのが 1924（大正 13）年であり，これよりも古いものとは考えにくい。一方で，寮内の古写真や寮生の証言などから，継続的に使われていたということであるので，新たな納品は考えにくい。明桂寮の定員は時代が下がるごとに減っていくので，寮生のための家具を増やす必要性も低く，明桂寮内にある後年に納入されたと考えられる家具は，このような形態をしていない。従って，この４種の家具については，1924（大正 13）年から明桂寮が開寮した 1927（昭和２）年ごろに製作されたものであると考えるのが穏当である。

５．同等品文化

新井竜治ほか（2018）によると，「大略の形状，サイズ，表面材料が同じであるが，内部材料，細部構造，塗装色，附属品などの細部が製造業者・納入業者の裁量に委ねられているもの」を「同等品」，それらが「蓄積して一群を成していくことによって形成された文化」を「同等品文化」と定義する。その上で，「全国の官公庁・国公立大学などの家具類は，一定以上の均質な教育環境を維持するためにそれらの組織に通底する「同等品文化」がある」とする。

上記で検討した学習机は，おおよその形状が同じで，細部に差異があると言える。長机については，発見された場所により，幅が 100mm も異なりトンボも異なっていたが，全体的に形態的な類似はあるので，広義に「同等品」と見てもよいかもしれない。また，箪笥とガラス棚においては，泉山寮と明桂寮において，大きな形態の違いは見受けられなかった。すなわち，これらは上述の「同等品文化」が本学でも存在したことを示唆するものである。

さらに踏み込めば，明桂寮と泉山寮で類似する家具が確認できたように，いくつかの寮で使用する家具について，学校当局で規定するような家具の規格があったことが想定できる。一方で，細部の差異は，発注先の違いであり，寮の家具の発注の最終責任者は寮監であることから[注 16)]，寮内で使われていた家具で同時期に発注したものであれば，完全に同一形態のものが納入されたと考えるのが妥当であろう[注 17)]。

６．まとめ

家具は，住生活のあり方に大きく影響を与えると同時に，営もうとする住生活のイメージに合わせて変更をすることが容易なものでもある。寮で使用されていた家具を考察することにより，寮生活の一端を知るための手がかりを整理することと同時に，研究があまり行われていない 1920 年代から日常生活に用いられていた木製家具の考察を行うことができた。本研究で明らかにできたことは，下記のようにまとめられる。

（1）上述の勉強机，箪笥，ガラス棚，長机には，1920 年代における本学における「同等品文化」が示唆され，本学のいくつかの寮で共通した規格が存在した可能性が考えられる。（2）明桂寮に残置されていた勉強机，箪笥，ガラス棚，長机は，古写真との検討から，1927（昭和 2）年の開寮時から使用されていたものであることが濃厚であり，ある程度，本学内での年代判定の基準とする事ができる。（3）当初のベッドは確認できなかったが，史料調査から，４人部屋の居室をベッドは折り畳み式であった。（4）これらの家具は，当初の推定の通り，1920 年代当時のものであると，確認できたので，当時の国策であった住宅改良運動の影響を受けた可能性が高

い家具であり，歴史的な価値があるものとして評価できる。

今回，調査で確認された家具類は，普段の学生生活に密着しており，その構造もシンプルなものである場合が多く，その歴史的価値が見逃されがちである。しかし，本学における歴史的なストックとして，その位置づけがなされる必要がある。また，多くの歴史的建造物と同様に，保存再生あるいは利活用といったことも視野に入ってくるものである。

また，同じ場所で，幅広い時代にわたって使われた各種の家具が，大量に残っている場所は珍しい。これには，さらなる分析が必要であり，クロノロジカルな編年指標の作成が可能であるので，極めて重要なコレクションである。また，明桂寮以外の寮や旧成瀬仁蔵住宅を含めて[注18)]，家具の悉皆調査を行う必要がある。

注釈

注１）例えば，小泉和子：家具と室内意匠の文化史，法政大学出版局（1979），小泉和子：室内と家具の歴史，中央公論社（1995）

注２）例えば，新井竜治：戦後日本の木製家具，家具新聞社（2014），新井竜治編著：戦前日本の家具・インテリア―『近代家具装飾資料』でよみがえる帝都の生活（上巻，下巻），柏書房（2017）

注３）藤井美羽（2022）における，家具調査の概要は下記の通りである。明桂寮内の家具のデータベース化を行い，各家具・什器の形状，寸法，特徴等の所見をまとめた。実測調査の方法は主に３D スキャン，手作業での実測を行い，写真撮影によって形態を記録した。写真撮影は正面・右面・背面・左面・上面・裏面・パースに加え，適宜詳細部分の撮影を行った。３D スキャンは点群データとして記録され，図面作成は Rhinoceros7 で読み取り基本的な寸法を測定し，スクリーンショットをとり一覧表としてまとめた。スキャンは全て原位置調査とするために明桂寮内で行った。なお，データは住居学科薬袋研究室に保存されている。この調査においては，33 種，約 350 個程度の家具について，寸法・原位置・詳細情報・写真などのデータを採取した。予備調査，各種家具移動および建築物内の清掃などは，2021（令和 3）年 7 月 14 日より 8 月 24 日にかけて行い，8 月 25，26 日に３Ｄスキャンを行った。その後，同年 10 月に家具の原状回復と補足調査を行った。作業は，藤井，関村，薮下に加え，大学院生であった石田雅美氏の協力を仰いだ。

注４）石田雅美ほか（2020）参照

注５）生活改善同盟会編（1924）p.132

注６）木檜恕一と生活改善同盟会の関係を論じたものについては藤谷陽悦（2009）がある。なお，ここでは，生活改善同盟会と木檜恕一の思想の差異についても，解説している。

注７）『家庭週報』889 号（1927 年 5 月 12 日付 10 面）の「問答欄」に，「本校家政学部に於いて，参考書としてをります本を掲げて見ますと，（略），木檜恕一氏著『和洋家具設計及製作』三円五拾銭，小石川区戸崎町博文館発行。同氏著『住宅家具設計及製作図』第一，二輯各三円，博文館発行。」とある。

注８）泉山寮は外部の書籍にも寮の模範事例として紹介されている。例えば，瀧浦文弥（1926）p.305 に実例として挙げられ，p.303 に平面図が掲載されている。

注９）「新しくて，美しいフアニチユア」が，寮建設と共に新たにデザインされて納入されたのかは，判別できないが，これ以前に本学において，大型の洋式寮がなかったので，新たに製作されたものである可能性は高い。

注 10）家具の古写真を検討するにあたって，日本女子大学学寮 100 年研究会編（2007）所載の図版を参照したが，『家庭週報』との照合の結果，「明桂寮の室内」（p.36），「明桂寮の台所」（p.42），「明桂寮室内」（p.272）は，すべて泉山寮であるので，注意を要する。

注 11）1927 年の明桂寮開寮時の居室は，4 人部屋でベッドが折り畳みであった。（『家庭週報』904 号（1927 年 9 月 16 日付），日本女子大学女子教育研究所編（1995）p.79，日本女子大学卒業生による聞きがきの会編（1999）p.105）。これは，上述にあげた生活改善同盟会（1924）の家具の改善方針に沿っているものと言える。

注 12）新井竜治・芝浦工業大学特任教授のご教示によると，籐椅子は，木製椅子よりも安価であったために籐椅子と木製机の組み合わせがよくみられたという。

注 13）藤井美羽（2022）p.137 参照
注 14）写真は次稿（薮下美雪ほか）の文中（p.138 写真１）にあるので参照にされたい。（石田雅美ほか（2020）においても掲載，p.100 写真５）
注 15）藤井美羽（2022）pp.126-127 参照
注 16）本学施設課には，明桂寮で発注した家具の見積書の一部が残されており，決済が寮監である藤原千代となっている。
注 17）明桂寮は佐藤功一の設計である事が知られており，明桂寮内部の家具は佐藤功一のデザインであることが検討されうる。しかし，「同等品文化」があるとすれば，その可能性は低くなる。
注 18）旧成瀬仁蔵住宅（成瀬記念館分館）は，文京区指定有形文化財であり，附（つけたり）として 14 点の家具が指定の範囲に含まれている。しかし，修理工事報告書（文化財工学研究所編（2018））においては，解説が示されておらず，文化財として史的位置付けが望まれる。なお，藤井美羽（2022）においては，旧成瀬仁蔵住宅における，指定外の歴史的家具の簡易的な実測も実施した。

参考文献

１）生活改善同盟会編：住宅改善の方針（1920）
２）生活改善同盟会編：住宅家具の改善，生活改善同盟会（1924）
３）瀧浦文弥：寄宿舎と青少年の教育，単純生活社（1926）
４）日本女子大学女子教育研究所編：日本女子大学寮の思い出 ―寄せられた原稿を中心に，日本女子大学女子教育研究所（1995）
５）日本女子大学卒業生による聞きがきの会編：先輩に聞く１，聞きがきの会（1999）
６）日本女子大学学寮 100 年研究会編：女子高等教育における学寮 ―日本女子大学学寮の 100 年，ドメス出版（2007）
７）藤谷陽悦：木檜恕一の住宅近代思想―生活改善運動を中心とした椅子式生活像，木檜恕一：住宅と建築（住宅建築文献集成第４巻）所収，柏書房（2009）
８）文化財工学研究所編：文京区指定有形文化財旧成瀬仁蔵住宅（日本女子大学成瀬記念館分館）移築修理工事報告書，日本女子大学（2018）
９）新井竜治，三島美佐子：九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクションの価値と課題，九州大学総合研究博物館研究報告，**15-16**，69-85（2018）
10）新井竜治，三島美佐子，吉田茂二郎：九州大学歴史的木製家具コレクションにみる同等品文化，デザイン学研究，**65**，40-41（2018）
11）石田雅美，関村啓太，薬袋奈美子：日本女子大学の洋風寮“明桂寮”と生活改善同盟会の考え方，日本女子大学紀要（家政学部），**67**，93-102（2020）
12）藤井美羽：日本女子大学の学寮における家具・什器一覧化と考察 ―明桂寮を対象として（日本女子大学家政学部住居学科卒業論文），私家版（2022）

謝辞：本稿は，藤井美羽（2022）の一部を再構成したものであり，日本女子大学総合研究所研究課題 75 の一部として取り組んだものです。また，新井竜治・芝浦工業大学特任教授のご助言をいただき，本学成瀬記念館には資料提供をいただきました。ここに感謝を申し上げます。また，作業に当たっては当時大学院生であった石井雅美氏のご助力をいただきました。